1869年から1870年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会

ヴラジスラフ・ラトゥィシェフ，ガリーナ・ドゥダレツ
醍醐　龍馬，兎内勇津流 /共訳

本稿は，ヴラジスラフ・ラトゥィシェフ，ガリーナ・ドゥダレツ編の史料集『侍従武官長イヴァン・スコルコフのプリアムール委員会（1869-1870)』（ユジノサハリンスク，2015年）の序文として収録されている論考「1869年から1870年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会」の翻訳である[1]。

【訳者解説】

北海道のすぐ北に浮かぶサハリン（樺太）島は，帝政ロシア時代の流刑地として知られる島である。著名なロシアの文豪アントン・チェーホフ(1860-1904）は，1890年にこの島を訪れ, その見聞による『サハリン島』を発表し，流刑地としての暗いその印象を克明に記している[2]。

この流刑地として知られるサハリン島の歴史的背景として，幕末維新期の日露両国間に生じた同島をめぐる国境画定問題があった。

16世紀末にシベリアに進出したロシアは，17世紀にはすでに太平洋岸に達

1　*В.М.Латышев, Г.И.Дударец*. Комиссия генерал-адъютанта И.Г. Сколкова в Амурском крае и на Сахалине (1869-1870 гг.) // При-Амурская комиссия генерал-адъютанта И.Г. Сколкова (1869-1870 гг.) Южно-Сахалинск, 2015. С. 7-34.

2　チェーホフ著，原卓也訳『サハリン島』中央公論新社2009（原本は*Чехов Антон Павлович*. Остров Сахалин. Москва.1895)。流刑地としてのサハリンについての最近の研究として，天野尚樹「サハリン流刑植民地のイメージと実態－偏見と適応」『境界研究』(1)，2010年）がある。

してオホーツクに拠点を築き，カムチャッカやアラスカ方面に進出していったが，アムール川流域については，清国とネルチンスク条約（1689年）・キャフタ条約（1727年）を結んで撤収を余儀なくされた。

しかし，1849年に開始されたゲンナージー・ネヴェリスコイ（1813-1876）のアムール探検は，アムール河口部に位置するサハリンが島であり，太平洋側からアムール川を遡行して航行可能である確証をロシア政府にもたらした。これをうけてロシア政府は，アムール川の河口に近いニコラエフスクに砦を築き，アムール川下流域，サハリン島，沿海州への進出を試みることになる。

ネヴェリスコイがサハリン島に最初のロシアの軍事拠点を設営したのは，1853年である。この年はちょうど，アメリカのマシュー・ペリー（1794-1858）が江戸湾に艦隊を率いて幕府に交渉を求め，ロシア政府が派遣したエフィーミー・プチャーチン（1804-1883）が長崎に来航した年でもあった。プチャーチンはこの時，幕府に対していったんはサハリン全体の領有を主張したものの後でこれを取り下げ，1855年に結ばれた日露通好条約においてサハリンでの国境画定は先送りされた。

こうしてサハリン島には明確な国境線が設けられないまま，日露双方が有利な地位の確保を目指して進出を競う状況になり，国境画定ができないまま20年が経過したことは，秋月俊幸や麓慎一らの研究が示す通りである[3]。

ここで指摘しておきたいのは，日本側の進出は主に沿岸部に漁場を開設・経営する形がとられたのに対して，ロシア側の進出は主に軍隊の駐留という形をとったことである。

日本側の経営する漁場は，主として現地のアイヌと漁期に派遣される季節労働者から成り，通年滞在者が少数にとどまる上に，軍事的バックアップが

3　秋月俊幸『日露関係とサハリン島：幕末明治初年の領土問題』（筑摩書房，1994年）。幕末の部分に関しては麓慎一『幕末における蝦夷地政策と樺太問題』（北海道大学博士学位論文，1995年），明治初期の部分に関しては醍醐龍馬『明治新政府と日露関係―樺太千島交換条約とその時代』（大阪大学博士学位論文，2017年）に詳しい。

弱く，軍を中心としたロシア側の進出に強い圧迫を感じることになった。

一方でロシア側としても，サハリン島のような補給困難な遠隔地に大規模な軍を置くことは困難であり[4]，領土として安定的に確保する面からも，これを植民地として開発し経営することが要請された。その中で，サハリンを流刑植民地として利用することが検討され，実施されることになる。こうしてサハリン島は流刑地となっていくのだが，従来，この政策が確定したのは，1869年に皇帝アレクサンドル二世がサハリン島を苦役と流刑の地だとした「苦役制度委員会規程」を裁可したことによるとされてきた[5]。しかし，ラトゥイシェフとドゥダレツによると，サハリン島を苦役と流刑の地とする方針が公式に定められたのは，1882年であるという[6]。

ロシア側がサハリン島の西海岸に良質の石炭を産出することを見いだしたのは，1852年のことである。ネヴェリスコイの探検隊のメンバーであるニコライ・ボシニャク（1830-1899）が炭層を発見して報告し，翌1853年に別のメンバーであるニコライ・チハチョフ（1830-1917）[7]がドゥエの炭鉱を開いた。この後，1856年にドゥエはサハリンで最初のロシア人定住地となった[8]。このドゥエに近いアレクサンドロフスクがロシアのサハリン統治の拠点と

4　ヴィクトル・シチェグロフによると，1868年にサハリン島に存在したロシア軍の拠点（哨所）は全部で４箇所あり，兵員は合計で300人程度だった。その後，1870年までにロシア人の居住地は20箇所に増加したが，総人口は3000人に達しなかった。*Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853-2002). Южно-Сахалинск, 2019. С. 29-30, 33.

5　2008年にサハリンで出た通史は1869年確定説をとっているが，2019年に出たシチェグロフの著書は，1869年のアレクサンドル二世の勅令はサハリンに苦役施設を設ける法的基盤を与えたと述べるにとどめている。*Высоков М.С.и др.* История Сахалина и Курильских островов с древнейших времен до начала XXI столетия. Южно-Сахалинск, 2008. С. 359; *Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений. С. 38.

6　*Латышев В.М., Дударец Г.И.* Комиссия В.И. Власова на Сахалине (1871-1872 гг.) // *Власов В.И., Мицуль М.С., Кеппен, А.П.* Из истории сахалинской каторги. Южно-Сахалинск, 2013. С. 22.

7　チハチョフは，その後1888年から1896年までロシア帝国海軍省長官を務め，1893年には提督に進級するなど，ロシア海軍の最高幹部となった。

8　*Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853-2002). С. 31-32.

なったのは，炭鉱が隣接していたことが大きい。

サハリン西海岸の炭坑は，炭層が地表近くにあって開発は難しくなかったが，よい港になる入江がなく，海が遠浅で船を近づけにくく，西海岸の南部を除くと冬季に結氷するなど，船で石炭を搬出する上で難があった。また労働力の調達も問題だった。こうした中で1859年に初めてサハリンの炭鉱に囚人が送られ，1860年にピョートル・カザケーヴィチ沿海州軍務知事（1814–1887）が採炭に流刑苦役囚を使用することを提案すると，1861年から1863年にかけて136人の囚人がドゥエに送られた。こうして，サハリンの炭鉱に囚人が使用されるようになったのである[9]。

一方，ニコライ・ムラヴィヨフ＝アムールスキー（1809–1881）の後任として東シベリア総督に就いたミハイル・コルサコフ（1826–1871）は，サハリンを農業植民地とすること求める上申書を，1867年に政府に提出した。サハリン島のアイヌが日本人に物質的に従属する状況を変化させたいと考えた彼は，この問題を解決するため，植民の必要を唱えたのである。この申請は限定付で承認されたものの，多くの移民を送り出すには至らず，その後，コルサコフは農業植民に否定的な意見を示すようになる[10]。

こうした中で，1860年代末になって，サハリンを流刑地とする問題は政府首脳の間で本格的に検討されるようになる。1869年に勅令によって組織されサハリン島を含む極東に派遣されたスコルコフ侍従武官長の委員会はその端緒を開いたと言えるが，その史料は長く公刊されないままだった。2015年になってようやく，サハリンの歴史家であるラトゥイシェフとドゥダレツによってこの委員会の報告書をはじめとする関連史料が『海軍中将И.Г.スコルコフ（1869–1870）のプリアムール委員会』（ユジノサハリンスク，2015年）として出版され，その活動を詳しく知ることができるようになったのであ

---

9 *Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853–2002). С. 32. *Панов А.А.* Сахалин как колония: очерки колонизации и современного положения Сахалина. М., 1905. С. 54.

10 麓慎一「明治維新期におけるロシアのサハリン島政策」『ロシア史研究』104号，2020年，130–136, 143頁。

る[11]。著者自身が述べるように，スコルコフの資料群に関してはそもそもロシア側でも新発見であり，我が国においても共有されるべき有益な情報である。同年に著者の二人は『一等文官A.M.ゴルチャコフとサハリン問題の解決』（ユジノサハリンスク，2015年）も出版しているが[12]，本書はこれを補完する意義も有している。

史料集を編んだ二人の歴史家は，委員会の背景と活動について冒頭に所収された序文代わりの論考に要領よくまとめている。これを読むと，雑居時代とよばれることの多い明治初年ごろの，ロシア側から見たサハリンの状況や，ロシア政府のサハリンに対する関心，サハリンが流刑植民地化される過程の一端を知ることができる。

なお，サハリンに流刑苦役囚を集中させる決定が正式に採択されるには，スコルコフ委員会の報告が行われてから，さらに時間を要した。

その理由のひとつとして，報告書が明確な結論を示すものでなかったため，さらなる調査を行うことになったことが考えられる。1871年に改めてヴァシーリー・ヴラーソフ六等文官（1838-1915）が率いる委員会がサハリンに派遣され，翌1872年まで活動した[13]。農学者ミハイル・ミツーリ（1836-1883）と地質学者アレクセイ・ケッペンがこれに参加し，全体的な報告書の他に，それぞれサハリンについての著作を発表している[14]。この報告書は，流刑苦

---

11 *В.М.Латышев, Г.И.Дударец.* При-Амурская комиссия генерал-адъютанта И.Г. Сколкова (1869-1870 гг.).
なおスコルコフ委員会については，麓慎一が明治初期のロシアのサハリン政策を検討する中で言及している。麓慎一「維新政府の成立とロシアのサハリン島政策－プリアムール地域の問題に関する特別審議会の議事録を中心に」『日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史(1)』（「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 No. 11）北海道大学スラブ研究センター，2006年。３頁。

12 *В.М.Латышев.Г.И.Дударец*. Государственный канцлер А.М.Горчаков и решение Сахалинского вопроса.Южно-Сахалинск, 2015.

13 ヴラーソフ委員会の活動については，天野前掲論文124-128頁に記述がある。

14 ラトゥイシェフとドゥダレツは，スコルコフ委員会の史料集に先立ってこの委員会の活動にまつわる著作を再刊し，関連史料を収録する書籍を出版した。*Власов В.И., Мицуль М.С., Кеппен, А.П.* Из истории сахалинской каторги. Южно-

役囚を使用して炭鉱経営だけでなく農業や道路の整備などを行うことは，サハリンが植民地として発展する基盤をつくる上で有用だとするものだった。

サハリンの歴史家シチェグロフは，流刑植民地化の決定を遅らせた別の要因として，当時，サハリン島がロシア単独の領土でなく日本と共有状態だったことを挙げる[15]。ロシア側は，流刑囚を送って入植を促進することにより，島でのプレゼンスを高めて領有に向けて優位を占めようとしたが，その一方で，島が共有状態にあることは，流刑地として法規と行政を整備する障害でもあったのである。なお，国境問題は樺太千島交換条約の締結により解決される。それと同時に，ロシアとしてはサハリン島に軍を駐留させる必要が薄れ，島に駐留する軍は大幅に縮小されることになった。

ほぼ同じ頃，サハリンの行政体制が変更された。1875年４月にサハリン島の暫定行政規則が施行され，南サハリン地区と北サハリン地区が設定されたが，この際，ドゥエに駐在する北サハリン地区長は，サハリン全島と沿海州の流刑苦役囚全般を統括するとされた。さらに1876年には，ドゥエ監獄に配置される官吏の定員が定められ，炭鉱に多数の流刑苦役囚を収容し使役する体制がつくられていくことになる[16]。

露土戦争（1877-1878年）後，1878年から翌年にかけてロシアに義勇艦隊が創設され，国庫からの補助金を得ながら，黒海に面するオデッサからスエズ運河を経由して中国や極東を結ぶ航路の運航を開始した。これによって，シベリアの長く苦しい陸路を通らずに，数百人単位の囚人をサハリンに輸送することが可能になった。1879年には囚人600人が，義勇艦隊の「ニジニ・ノヴゴロド」号により，その囚人輸送の第一陣としてドゥエに到着した[17]。こうしてサハリンへの囚人移送は本格化し，1880年から1900年までの20年間

Сахвлинск, 2013.

15 *Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853-2002). С. 39.

16 *Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853-2002). С. 40.

17 義勇艦隊の成立とその活動については，左近幸村『海のロシア史：ユーラシア帝国の海運と世界経済』（名古屋大学出版会，2020年）を参照。サハリンへの囚人輸送については，同書 105-106頁に記述がある。

に25000人近くの囚人と，約4000人の同伴者が島に入った。矯正労働期間を終えた囚人たちは10年間大陸に戻ることを禁じられ，島で移住囚として暮らした。それからある程度の期間が経過し農民身分に編入されると，島を去ることも法的に可能になったが，それぞれの事情があってか，島を離れる者は多くなかった。1890年代になると，サハリンにはこうして刑期を終えた元囚人たちによって100を超える村がつくられ，農業が発展していったほか[18]，漁業など他産業の展開も模索される[19]。

樺太千島交換条約（1875年）から日露戦争（1904-1905年）までの30年間に，サハリン島のロシア人社会はこうして大きな変化を遂げたのであるが，スコルコフ委員会の活動は，その起点のひとつとして位置づけられるのである。

なお，以下の訳文に対する註はすべて原文にあるもので，訳者による註は全て本文中に［ ］に入れて示した。

【訳文】

1868年12月17日，東シベリア総督ミハイル・コルサコフ[20]は皇帝アレクサンドル二世に「アムール地方の整備についての恭順報告書」[21]を上奏した。上奏した理由を指摘して，彼は次のように書いた。「本年沿海州に滞在しているとき，私はこの地方の繁栄のためには，この州の新たな必要性にかなう，富の発展と住民の福祉の向上，商工業の発展に向けたより良い行政と支援の可能性を示すような，沿海州での行政機関の改編と強化をただちに行うこと

---

18 *Щеглов В.В.* Опыт сахалинских переселений (1853-2002). С. 40-41, 43. 天野前掲論文 117-118, 137-139頁。

19 たとえば，神長英輔「開かれた海の富と流刑植民地－日露戦争直前のサハリン島漁業」原暉之編著『日露戦争とサハリン島』（スラブ・ユーラシア叢書 10）（北海道大学出版会，2011年）を参照。

20 ミハイル・セミョーノヴィチ・コルサコフ（1826年１月１日モスクワ生－1871年３月16日サンクトペテルブルグ没）。陸軍中将，国家評議会議員，1861-1871年東シベリア総督を務めた。

21 РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 7-25об.

が必要不可欠であることを，この目で確かめました。」

前任者であり指導者であるニコライ・ムラヴィヨフ＝アムールスキー（1809～1881）から総督のポストを継承しながら，コルサコフはそれと一緒に極東で発生した複合的問題を受け取ることになった。新しい土地を併合し，地域を植民するロマンチックな時代は，そこを開発して極東の領土を中央と行政的・経済的に統合し，様々な交通や通信を整備し行政機構を仕上げるという，より散文的な時代に代わった。それは，アレクサンドル二世が創始しロシアの大改革の時代であった。改革は極東にも関係していた。首脳レベルで極東問題を機動的に解決することを可能にしたアムール委員会とシベリア委員会が廃止された。いまや，重大問題については，それぞれの具体的な問題について，臨時の協議会や委員会が設置されることになった。政府の中での極東問題の議論は長引き，不一致だらけだった。極東に獲得した新しい領土をどうすべきかについて，統一的な見解を作成できなかった。この状況下で，多くの具体的な提案をもたらすシベリア総督の覚え書きは，まさしく時宜を得ていた。

恭順報告書の中でコルサコフは，大がかりな行政改革の計画を述べた。強力な独立した地方政府を作るために，彼はハバロフカ［現在のハバロフスク］を中心とし，ザバイカル，アムール，沿海の各州を含む新しい総督府を設置することを提案した。彼はまた，海軍を再編成し，太平洋艦隊に軍事的目標を委任し，シベリア小艦隊に輸送機能の実行を委任することも提案した。通信問題は切実な問題だった。香港や上海経由でイギリスの郵便を利用せざるを得なかった太平洋の海軍との作戦上の通信を，是非ともイルクーツクに確立することが必要だった。

サハリン問題に覚書の多くの紙幅が割かれた。彼は次のように指摘した。「ロシア人の日本人と先住民，および島の土地と天然資源の利用に対する不明確な関係により，ロシア帝国と日本の共有地となっているサハリン島は，日本政府との紛争と誤解の絶え間ない原因になるかもしれません。

この政府は，おそらく外国人に教唆されているその行動から見るに，主に

島の南部で自らの影響力を強化することを求め，現地の住民を自分に完全に服属させようと努めていて，本年は自国民をそこへ移住させて，植民の方策に訴えようとしています。島で日本人が事実上優位に立つことを許さないためには，可能な限り分配されている資金を執行して，そこにロシア人を移住させることが必要です。ただし，衝突が起こりかねない危険とは別に，そうした想定は，島での我々の軍事力を一個大隊まで増強しすべての軍政・民政官署の案件を管轄するために，現地の軍政所を設置する必要性を提起します。それゆえ，サハリンの確実な占領のために必要な方策の中に，私は既に箇条書きにした上記の法規を含めておきました[22]。」

コルサコフの全提案は，14箇条に分かれていた。

「１．［沿海］州の軍政機関と民政機関をハバロフカに移転すること。

２．シベリア小艦隊司令官の職を廃止し，陸軍省から州知事を任命すること。

３．太平洋南岸の１つの湾に軍港を築くこと。

４．シベリア小艦隊を二つの支部，すなわちニコラエフスク港の支部と，南岸の１つの湾の支部に分割すること。

５．太平洋に常設艦隊を置くこと。

６．ウスリー地方に４つの軍管区を置くこと。

７．騎兵の国境警備隊を組織すること。

８．州南部の国境地点に国境委員の職を置くこと。

９．歳出官署を南の湾の１つに置き，州国庫金管理局をハバロフカに置くこと。

10．国税を財源にポシェットとハバロフカの間の郵便を整備すること。

11．ハバロフカに市警察局を設置すること。

12．南ウスリー地方の植民のために資金を提供すること。

13．州内に存在する電信連絡を維持すること。

14．サハリン島に駐留する軍を増強し，現地に軍政部を設置すること[23]。」

22　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 21–22.

23　同上 Л. 23об–24об.

コルサコフの「恭順報告書」に接して，アレクサンドル二世は次のような決定を下した。「総督自身の出席を求めて，大臣委員会で検討すべし[24]」。官僚機構はただちに始動し，その結果，「陸軍中将の提示した案を詳細に審議する形として」「陸軍中将ルトコフスキーを長とする特別委員会を直ちに設立すべし」と決定された。委員会には，財務省，外務省，陸軍省と海軍省の代表者が含まれていた。委員たちは極東のことを知る人々で，イヴァン・ルトコフスキー委員長[25]自身，最近東シベリアに出張しアムールと沿海州を歴訪して帰ってきたばかりだった。

アレクサンドル二世はこの地方において変化する国際情勢を考慮に入れて，問題の検討を先延ばししないよう求めた。日本の明治維新と関連して，サハリンの関係で急迫した状況が発生し，中国ではロシアとの国境画定条約を見直す試みがなされていた。

ルトコフスキーの委員会は，コルサコフが提起した次の２つの問題を詳しく検討した。１．サハリンの体制強化，２．南ウスリー地方の国境の確保である。

サハリン問題を審議した際，委員会のメンバーである外務省アジア局長ピョートル・ストレモウーホフ[26]は，「外務省に存在する皇帝陛下のご命令に基づき，サハリン全体を占領する必要性に関する問題は最終的に解決済みと考えるべきであり，それ以上の検討にはなじまない」として，必要不可欠な問題の定義づけを行った。彼の考えによれば，「委員会はこの島での我々のさらなる確立と，現地の住民に対する優勢な影響力の獲得を促進する方策についてのみ審議できる。」そして，この関係において唯一の有効な方策は，「植民と産業，特に石炭の発展だと見なされるべきである。」

さらにストレモウーホフは次のように説明した。「太平洋，日本海，中国

---

24 同上 Л. 64об.

25 イヴァン・セルゲーヴィチ・ルトコフスキー（1805年３月25日-1888年12月17日）。侍従武官長，陸軍砲兵大将，軍事評議員。

26 ピョートル・ニコラエヴィチ・ストレモウーホフ（1823-1885年）。ロシアの外交官・政治家，外務省アジア局長（1864-1875年）。侍従兼二等文官。

の沿海では，より良い石炭に対する需要は年々大きくなっている。サハリンの石炭は，その品質において，この地域で発見された他の全ての種類を凌駕している。そして，サハリンの炭鉱を自分たちで採掘する許可を求める外国人からの請願が，既に外務省に来ている。このような提案は，これまでいつも却下されてきた。しかしながら，サハリンの炭鉱が豊かであることと，太平洋北岸全般に石炭が不足していることについて，信頼できる情報がますます広まるとともに，もし我々自身がそこで適切に石炭を採掘する努力をまったく行わないならば，サハリンから外国企業を排除しつつづけることは不都合になっていくであろう。そういうわけで，サハリンでの石炭採掘にロシア人の企業家たちを引きつけることが，ただちに是非とも必要である。もしこれがはっきり不可能ということであれば，時とともにそれを民間に移管することを期待しつつ，当初は政府の資金によって石炭採掘を始めなければならない[27]。」ストレモウーホフのこの考えに対し，委員会の全メンバーは全員一致で同意した。

サハリンの状況は，1869年３月５，７，10，13日と，ルトコフスキーの委員会でさらに何度も審議された。サハリンについて語り，サハリンの植民とそこでの産業の発展についてストレモウーホフの論拠に同意しながらもなお，多くの委員は，「サハリン島が辺境にあること，気候と土壌の特性により，サハリンで自発的な植民をし得る望みはない」と疑念を表明した。東シベリア軍管区の参謀長ボレスラフ・クケーリ少将[28]も，このことについて語り，プリアムール地方の移民に対してこれまで行われた，サハリンに移住するあらゆる提案は，ウスリー地方よりもずっと多くの補助が国庫から受けられる

27　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 172об–173об.

28　ボレスラフ・カジミロヴィチ・クケーリ（1829–1869年）。陸軍少将（1862年），陸軍工科大学校卒（1850年），東シベリア行政総局カザーク部長（1856年），東シベリア軍団参謀長（1859年），ロシア地理学協会東シベリア支部長，社会団体に活発に参加した。1863年ザバイカル州軍務知事・ザバイカル・カザーク軍団任命アタマンとなる。1865年以後東シベリア軍管区参謀長。ヴィルノ［現リトアニア］の貴族出身。

のだが,「今に至るまで不成功のままだ」と指摘した。

サハリンに「強制的移住者」を定住させる可能性が詳しく検討された。ルトコフスキー委員長の提案により陸軍大臣から回付された報告書が通読されたが，その報告書は，苦役制度を改正する問題について，さらにもう一つの「皇帝陛下の命により立ち上げられた委員会」が準備したものだった。この報告書の基本的論点は，疑いのない関心を惹起するものだ。

「１．現在の苦役制度が効果をあげていないことを考慮し，身体刑を廃止するため，流刑苦役囚を監視人と警備隊の実効性のある監督下に置き，彼らが容易に逃亡する可能性を断ち切るように，この仕事を整えることが決定的に必要不可欠である。

２．苦役労働の現在の体制に適応しながら，望まれる結果の達成は甚だ困難であると本委員会は考え，フランス法が明確に好む重罪人に対する苦役判決，すなわち犯罪者を植民地に流刑するという，もっと単純な方法に訴えることがよりよいことだと認める。

３．サハリン島はこの目的に適した場所であると認め，流刑の懲罰的意義との関係でこの島に帝国の他のどの場所よりも大きな優先度を与える。

４．帝国の他のすべての地域と比較してサハリンの利点は，苦役期間を満了して矯正中の人々の列に加わった者からあらゆる逃亡の機会を絶ち，その結果，犯罪者に課せられた刑罰を段階的に緩和する制度をたいへん幅広く適用し，彼が自立した植民者の生活に向けた準備をすることが可能になることが，最大の要点であることを，委員会は見いだした。

５．委員会は，サハリンでの流刑囚の労役を，炭鉱の開発や港での仕事に利用することが可能だと考える。

６．財政的側面からは，サハリンに流刑囚を送ることは，政府にとってかなり大きな出費を伴うことになるだろうが, いずれにせよこの出費の規模は, 帝国内で苦役労働を組織した場合と比べて限定的であろう。報告書に掲載された，サハリン又は帝国内部の労働の組織化に関する支出の概算は，次の数字に示される。

	帝国内部	サハリンで
Ⅰ．給料，流刑囚の衣類及び食料に関する支出	556,650.	542,000.
Ⅱ．行政と警備のための費用	300.000.	200.000.
Ⅲ．帝国内に10年分の監獄を設置しそれを維持する費用	600.000.	150.000.
サハリンでの監獄設営は自身の囚人により行われ，用具に対する出費だけが必要とされるだろう。しかし，サハリンへの流刑は，島に流刑囚を定住させることを最終目的としており，10年間に150万ルーブルまたは毎年種子等を購入することが想定される。		
Ⅳ．囚人の護送	33.969.	105.400
年間支出合計	1.490.619.	997.800
すなわちサハリンにおける流刑囚制度は，ロシア帝国内よりも年間50万ルーブル少なくなるだろう。		

この見積もりは，12000人の犯罪者総数のうち，サハリンにはその半分または6000人が移住地に定住し，既に国庫の扶助を受けないで済むようになる，との仮説に基づき組み立てられた。

それに続いて報告書は，４年の経過期間に全ての流刑苦役囚をサハリンに段階的に移住させる手段についての計画で結ばれている。

しかし，報告書に述べた苦役労働制度の現在の不都合と，サハリンへの流刑が帝国の他のどの土地よりも優れているサハリン流刑の利益について，委員会は，報告書で表明された，サハリン島で石炭採掘を行ってこの島にロシア人を定住させるために，犯罪者をサハリンに送るという考えを，どの程度利用するかどうかという問題を検討するにとどめた。

ドゥエにおける炭鉱採掘の経験は，この種の労働に流刑囚を使用することが，サハリンで特別の支障がなく，もし石炭の船積みや，または炭鉱からそれを沿海州の大陸側にあるどこかの港への輸送に便利な地点を整備するために資金が振り向けられるならば，小規模であっても特に経済的に有利でさえあるだろうことを示している。

こういうわけで，自分の労働によって自分を養う自立した穀物生産者として流刑苦役囚を島に移住させることについて，委員会は，多数の人数を定着させる可能性は疑わしいと判断したが，この件についての最終的判断を下す前に，サハリンで穀物栽培全般を行う可能性について，実証的なデータを持つことが必要不可欠であると認めた[29]」。

ともにサハリンで勤務したことがあって島の気候条件を熟知し，ペテルブルクに住んでいた陸軍大佐デ＝ヴィッテ[30]とレギョール医師が委員会に招かれた。二人は，島のロシア軍哨所での穀物栽培と野菜作りの経験とその観察した気候について，十分に詳しく描写した。サハリン入植について二人の結論は完全に肯定的だった。しかしそれでも，委員会の議事録には次のように記された。「デ＝ヴィッテ陸軍大佐とレギョール医師による上述の証言により，本委員会は，もしサハリン南部で穀物栽培を発展させることができても，特別な努力が不要ということではないという想定に導かれた。それゆえ本委員会は，現時点では，そこに大きな移住地を設けることにするのは軽率であり，移住者に自分を養うための補助的な手段を提供し得る，主として島の南部に開かれた炭鉱近くに，流刑苦役囚の少数の家族のみを移民させる試みに限定すべきであると考える[31]。」。

サハリンにおけるロシアのプレゼンスを強化し，南ウスリー地方で中露国境を固める問題について，ルトコフスキー委員会の提案はあまり明瞭なものではなかった。委員会は，この地方の行政改編についてのコルサコフの提案についても，行き過ぎだと見なした。しかし，ルトコフスキー委員会の極めて控えめな提案でさえ，少なからぬ新規支出を想定していた。大蔵大臣は新

---

29 РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 174–176об.

30 ヴィクトル・パーヴロヴィチ・デ＝ヴィッテ（1832–1882）は陸軍少将である。クールラント［現在のラトビア西部］の古いドイツ系氏族に属す。1849年に貴族陸軍幼年学校を卒業した。東シベリア総督副官。移住者の生活を整えるためサハリン島に派遣された。サハリン駐在部隊長（1865–1868）・陸軍大佐。サハリン島に初期の一連の哨所を設置した。1869–1876年にヤクート州民政知事の職務を執行した。

31 РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 178–178об.

規支出に対して断固反対した。ルトコフスキー委員会の活動と平行して，コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公（1827–1892）を議長とするプリアムール地方に関する特別協議会も活動した。1869年４月２日の会議では，３月31日の特別協議会についての皇帝宛の「恭順」報告書が読み上げられた。「わたくしを議長として行われた，プリアムール地方とサハリン島で是非とも行うべき方策に関する東シベリア総督の提案を議題とした協議会において，大蔵大臣は，その地方が必要とするものを知るために，各省庁の代表者から成る委員会を来春現地に派遣することが有益であるという考えを表明しました。

私は大蔵大臣のこの提案にまったく賛成であり，次のように考えます。すなわち，この件を成功させ，互いに合致することのない各省庁の利害を調整するためには，この委員会が，皇帝陛下の直接の選任により，陛下の個人的信用を得ている者を委員長とする委員会であることが非常に有益です。そのような人がすみやかに任命されることは，委員長と各委員が省内の情報に通じることができ，彼らのためのしかるべき訓令を作成できるようにするために必要不可欠だと思われます。

上述のことを，皇帝陛下の御検討に供すべく提示し，さらなるご指示を請願することは私の義務だと考えております。」

この報告書に続いて，皇帝自筆の決定が書き込まれた。「同意し，スコルコフ侍従武官長を任命する[32]。」

イヴァン・グリゴーリエヴィチ・スコルコフ（1818–1879）は貴族の家に生まれた。海軍幼年学校を卒業した。輝かしいキャリアを歩み侍従武官として奉職した。勇敢な将校であり，繊細な廷臣であった彼は，長い人生の間に友人だけを得たわけではなかった。ここに陸軍大臣ドミトリー・ミリューチン（1816–1912）が彼について書いた，次のような文章がある。「沿海州への新たな調査隊の長に，スコルコフ侍従武官長が据えられることになった。またも海軍軍人で，当時「分艦隊長」の任にあった人物で，視野が狭くさっぱ

32　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 198–199.

り成長しておらず，［アレクサンドル・］メンシコフ公爵［1787-1869，1836-1855年に海軍大臣を務めた］に何年も気に入られたというだけで，航海士から彼の副官になり，彼のお気に入りになったが，［クリミア戦争の戦場となった］セヴァストーポリで片腕を失った。スコルコフの全ての仕事の舞台は上官を個人的に喜ばせることにあり，非常に困難な任務を課される，このような委員会の仕事の指導者に彼を任命することを正当化する，いかなる決定的データも彼にはなかった。[33]」ミリューチンの評価には，海軍軍人に対する陸軍省の嫌悪感がはっきり見てとれる。

しかし，文書的証拠，何よりもまず海軍幼年学校の卒業生達の資料に目を向けてみよう。「貴族出身の未成年者」でグリゴリーの息子，イヴァン・スコルコフは，1829年１月７日に海軍幼年学校長に入学願を提出した。「私が生まれてから11年経ち，ロシア語で読み書きすること，算術，文法，地理，幾何学の一端，キリスト教史，教理問答，デッサン，フランス語とドイツ語の読み書きを習いましたが（11歳の「教養の無い人」にしては学問のリストは大げさではないか－筆者注），皇帝陛下にお仕えするかはまだ決めておりません。しかし，私の両親の同意をいただき，海軍幼年学校で教育を受けることを希望しております。この願書に付け加えますと，私は実際に貴族の品格を持ち，（やもめとなった）９等文官グリゴリー・スコルコフの嫡男であります。わが父の領地はニジュゴロド県ゴルバトフ郡にあり，農奴が30人おります。[34]」

海軍幼年学校長は海軍中将で受勲者でもあるイヴァン・クルーゼンシュテルン（1770-1846）で，「貴族の未成年者イヴァンのこの願書を是とすると決定した。」偉大なるロシアの艦隊指揮官だったクルーゼンシュテルンは，最後の15年間（1827-1842）［原文では12年間（1827-1846）としているが，年代と計算の両方が間違いと思われ訂正する］，海軍省の主要教育施設の長だっ

---

33 *Ремнев А.В.* Россия Дальнего Востока: имперская география власти XIX–XX веков. Омск, 2004. С. 237. から引用。

34 РГА ВМФ. Ф. 432. Оп. 5. Д. 5275. Л. 1-5.

た。「彼はこの施設に学科面でも教育面でも大きな衰退を見出し，精力的にその根本的な改造に取り組んで，厳しい闘争なしには済まなかったが，この施設のモラルと教育の水準を引き上げることに成功した。その際将校クラスが設けられ，海軍少尉として卒業した者の中の優れた者が，そこで３年の教育課程を修了した。[35]」イヴァン・スコルコフもまた優秀な生徒の中に数えられ，1834年12月19日に海軍少尉に昇進して将校クラスに残った。1833-34年にこの学生は「ニコライ一世」号，「アレクサンドル二世」号に乗ってバルト海を巡航し，「海軍少尉から曹長の職にふさわしい働きに対して」プロイセン国王から銀メダルを授与された。黒海艦隊に転任するまで，バルト海の諸港をめぐり航海した。1838年にはラガー船[36]「オランエンバウム」号に乗り組んで皇帝ニコライ一世と大公たちに随行してストックホルムに行き，「優れた功績」により中尉に昇進した。1839-1840年にはカフカスのアブハジア遠征隊に参加し，トゥアプセとプセスワペ［ともに黒海北東岸］の上陸部隊の一員となった（外国のものも含む幾つかの勲章を受け，さらに海軍少佐の称号を授与された）。1841年に彼は海軍軍令部参謀長の副官となり，次いで海軍親衛隊に転任した。1846年にラガー船「ペテルゴフ」号の艦長になり，海軍航海師団の大佐に昇進するとともに，侍従武官に任命された（1851年）。1853年には，コンスタンチノープルに公使として派遣されたメンシコフ公爵の側に仕えた。［クリミア戦争の］シノープ海戦の参加者である。アルマ川の戦い（1854年）で腕に重傷を負った。戦闘将校は非凡な健康状態を備えていなければならない。にもかかわらず皇室への奉仕は継続された。1858年，彼は皇帝の側に仕える分艦隊長に任命され，その旅行に随行した。すなわち，バルト地方をめぐり（1857-1858年），アルハンゲリスクとソロヴェツキー修

35　«Русский инвалид». СПб., 1877. №228. 14 откября. С. 4.

36　ラガー船はあまり大きくない帆船である。短い中檣（ちゅうしょう）の付いた３本のマストに四角形の縦帆と中檣帆，および帆の面積を減らす場合は船内に収納できる水平の一本の第一斜檣に船首三角帆を張る。船体は細長く舷側は低い。オールを備える。主に通報艦に用いられた。兵装は12門以下の小口径の大砲である。

道院へ行き（1858年），ニジニ・ノヴゴロド，オデッサ，クリミアに立ち寄りながらボルガ川とドン川を巡った(1861年)。1860年に海軍少将に昇進し，皇帝の従者に加わった（1867年から侍従武官長，1868年から海軍中将）。1866年に，彼はコペンハーゲンからロシアへヨット「軍旗」号でダウマー王女［デンマークの王女。アレクサンドル皇太子の妃マリア・フョードロヴナとして迎えられ，1881年に皇太子がアレクサンドル三世として即位したことにより皇后となった。1847-1928］に随行し，1877年までずっと毎年クリミアで休息する后妃に随行した。皇帝の委任により，政治的動乱に関連する情勢を調査するため，とくに西シベリアに出張した（1863年）。1879年12月３日に死去した[37]。

アレクサンドル・ニコラエヴィッチ［皇帝］は，なぜその忠臣イヴァン・スコルコフにプリアムール委員会（「監査」）を率いる任務を付託し，彼の経験と功績に対してしかるべきものを与えたかが，明らかになった。

1869年４月２日のプリアムール問題に関する特別協議会において，ルトコフスキー委員会がサハリン島について緊急に採択することが必要だとする方策に関する見解と結論が聴取された。ミハイル・レイテルン大蔵大臣[38]は，ルトコフスキー委員会が提案した措置に資金を出すことに対して，再び反対した。そして，極東に出発するスコルコフ委員会が監査も行うことになっているので，監査の結果が提出されるまでは，支出を最小限にとどめることを提案した。しかし，アレクサンドル・ゴルチャコフ外務大臣・一等文官[39]は，「サハリン島における我々の権力と意義を維持するための実効性のある措置をただちに取る必要性に対して」列席者の注意を向けさせた。「なぜなら，

---

37 Обший морской список. Ч. 11. СПб., 1890. С. 539-540.

38 ミハイル・フリストフォロヴィチ・レイテルン（1820-1890）は，帝政ロシアの政治家，伯爵，蔵相（1862-1878）であり，ロシア政府の長［大臣委員会議長］（1881-1886）を務めた。

39 アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ゴルチャコフ（1798-1883）は，非常にすぐれたロシアの外交官であり，アレクサンドル二世時代に外務省を率いたロシア帝国の最後の一等文官（1867年以降）であり，公爵だった。

この地方から受け取る情報は，島に我々が浸透することに対して，日本人が決然と対抗しようとしていることをますます示すようになったからである[40]。」

４月末，ルトコフスキー委員会はその課題を果たして廃止された。スコルコフ委員会の組織が開始された[41]。代表者を委員に送り出した各省庁と外務省は，スコルコフ委員会が従うべき訓令についての提案を提出した。外務省は２つの訓令案をコンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公に提出した。ゴルチャコフ外務大臣は，添付した覚書で次のように指摘した。「この際，アムール地方とサハリン島に出張する委員会への指示書，およびスコルコフ侍従部官長に対する特別の秘密訓令に組み込むべき外務省からの訓令草案を大公殿下に同封することは，わたくしの責務だと考えます。これら２つの訓令は，大公殿下の下にあった委員会で外務省が表明したことを基礎に作成されたものです。[42]」

外務省の秘密訓令では，プリアムール地方の全体にとって重要ないくつかの政治的な問題に注意が向けられた。それらは「３つの対象」に関わっていた。「１．外国人が我々の海岸沿いで行っている捕鯨と漁業，２．サハリン

40　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 200.

41　４月30日，海軍省長官官房に国有財産大臣の署名のある以下の書簡が届いた。「プリアムール地方とサハリン島を調査するため皇帝陛下のご指示により編成される委員会の支度を調えるため，わが省に委嘱された代表者として，わたくしは農業部の八等文官リュドゴフスキーを任命したことを，貴職にお知らせする栄誉を有します」（РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 290）。同年５月１日，海軍省長官官房次長Ｋ．マンはプリアムール委員長の予定者に，次の人々が委員に任命されたと伝えた。内務省からはカルポフ四等文官，陸軍参謀本部からはズィコフ陸軍大佐，海軍省からはポポフ海軍大尉である。ヴォルコフ七等文官が委員会事務局長に任命された（同文書 Л. 288）。５月２日，大蔵省はウラル山脈鉱山管理局付特任官吏で鉱山技師・六等文官のデイフマンを代表に任命し（同文書 Л. 289），さらに帝室領部の六等文官オシポフを追加した（同文書 Л. 332）。５月５日，皇帝のスコルコフ侍従武官長への指示により，クロンシュタットの海軍乗組員ムハーノフが委嘱された（同文書 Л. 294）。最後に，フョードル・リトケ海軍提督（1797–1882）の請願と宗務院総長［ドミトリー・トルストイ］の協力により，掌院パラーデイ（1817–1879）がプリアムール委員会に加えられ，アムール地方とウスリー地方の調査のため北京から１年間呼び出されることになった（同文書 Л. 343–344）。

42　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 313–313об.

における我々の地位，３．アムール地方での外国領事館設置の認可[43]」である。

スコルコフ侍従武官長の委員会のための訓令は，1869年５月までに策定され，コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公によって承認された[44]。委員会の主目的は簡潔なものだったが，前文では飾り立てて述べられていた。「近年，プリアムール地方のいくつかの部分，特に沿海州の行政では，これらの部分の状況変化により生じた著しい不都合が現れた。その結果，当該地方の行政管理の相応しい変更に関する提案が出されたが，その主なものとしては，総督府の設置，ニコラエフスクからハバロフカへの民政，軍政の中心地移転，南ウスリー地方の行政整備，主要司令官の名前を冠した港の設置を伴う海軍の拠点を南方の港の一つに配置すること，ロシアの植民を強化すること，国境を警備すること，サハリン島における我々の立場を強化すること，その他である。これらの提案の全ては，さまざまな行政部門にかかわる無数の複雑な問題を包含していて，現地の状況の詳しい調査と，発生している問題の合理的解決の基礎にすることができる，実際のデータの収集を要請する。時には矛盾した情報がもたらされるこの地方の状況の正確な解明は，プリアムール地方に，その福利の強化と発展に最も適したものとして最終的に採用すべき活動体系をしっかり確立するために，必要不可欠である。

殿下の主宰のもとでプリアムール地方に派遣される本委員会は，上述した政府の必要性を満足させることを，自らの目的としなければならない[45]。」

訓令は11部で構成され，回答を要する40の問題が設定された。これは，広大な沿アムール地方を監査し研究しようとする真剣な作業計画であり，その遂行は簡単ではなかった。委員会は６月にイルクーツクに到着すると，容易でない目標を達成するためにすぐに散っていった。偶然にも委員会の協力者

43　同上 Л. 321–321об.

44　コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公（1827年９月９日，サンクトペテルブルク－1892年１月13日，ペテルブルク近郊のパヴロフスク）は，海軍大将で，皇帝ニコライ一世とアレクサンドラ・フョードロヴナの間の第五子であり，２番目の男子だった。

45　РГА ВМФ. Ф. 398. Оп. 33. Д. 12143. Л. 6–7.

に含められた流刑ポーランド人学者ベネディクト・ディボフスキ[46]の，委員会についての印象は興味深い。彼は自伝の中で次のように書いている。「1868年６月（ディボフスキの誤りで実際には1869年－筆者注），侍従武官長イヴァン・グリゴリエヴィッチ・スコルコフがアムール地方とウスリー・沿海州を現地調査し，それについて恭順報告書を提出することを目的とする委員会を伴ってイルクーツクにやって来た。予期しない偶然のおかげで，私は腕の切断後のなかなか治らない傷を看るため，侍従武官長殿の医師であると同時に，このような広大な地方を急いで旅行するときに可能と考えられる範囲で動物学的コレクションを収集するための，博物学者として任命された。６月末から10月まで続いたこの旅行の間，私はアムールの魚類相と先住民の生活に特別な注意を払った。私の仕事の第１の部分について言えば，魚についての観察の結果と標本の記述を，私は帝室ロシア地理学協会東シベリア支部の出版物で公表した。この協会が出版のために与えてくれた補助金のおかげで，私は収集された種を記述しそれにしかるべき挿絵を添えることができた。活動の第２の部分について言えば，私の意見を共有する人々であるスコルコフ侍従武官長とカルポフ委員と出会い，極東に啓蒙の光をもたらすことを目的とする，私の見解では国家にとって最も妥当なプログラムの計画を描くことができた[47]。」

スコルコフがペテルブルクの高官たちに出した手紙は，委員会が配慮した範囲と当面した問題をよく物語っている。委員会のメンバーは資料収集のためプリアムール地方じゅうに散らばり，スコルコフ自身も，サハリンに送られるための流刑囚が集結するスレチェンスクに出発した。1869年４月18日，アレクサンドル二世は「苦役労働の組織についての委員会規則」を裁可したが，そこには，「その労役の目的に適合した場所で彼等を使用するために，

46　ベネディクト・ディボフスキ（1833-1930）は動物学者である。1863-1864年のポーランド蜂起に参加したことで，東シベリアに流刑された。バイカル湖，アムール川流域，カムチャッカの自然条件と動物相を研究した。1883年からリヴィウ大学教授。1928年にソ連科学アカデミーの外国人通信会員に選出された。

47　http://www.magicbaikal.ru/history/dybovsky.htm

サハリンに800人の流刑苦役囚を送り出すことにただちに着手する[48]」ことが指示されていた。委員会の作業のための訓令には，以下のことが明記されていた。「17．本年に流刑囚800人をサハリン島に送り出すことに関する勅令の実施状況を直接調査すること。苦役流刑囚が定着するために割り当てられた土地が，政府の目的にどの程度ふさわしいものかを自分で確かめ，地域の状況を考慮し地方官とのしかるべき合意に基づきながら，流刑苦役囚をサハリンに送り，彼らを島に定着させる今後の詳しい計画を策定すること。[49]」

皇帝の指示は遅滞なく実行しなければならないことであり，スコルコフもこれに従事した。スレチェンスクに到着すると，彼は喜びのない光景と出会った。サハリンに送られるため集められた流刑囚は，身体的にこの先の旅をする準備ができていなかった。彼らは体力がなく大多数が壊血病を患っていた。800人の流刑囚の一団を送るための適当な輸送船が無かった。アムール川の春の増水に対応できないために残されていた穀物用の艀に乗せて，彼らを送り出すことが想定されていた。全てを理解したスコルコフは，ツアーリの指示を実行する可能性に疑問を持った。彼はこのことについて，アレクサンドル・チマーシェフ内務大臣（1818-1893）に宛てた手紙の中で説得力をもって生き生きと描いた[50]。実際にサハリンに送ることができたのは250人で，残りはソフィイスクとニコラエフスクに一時配置されたのである。その後サハリンに滞在したスコルコフは，こんなに多くの囚人が働く場所はどこにもないことを見て取った。彼らの力によって石炭を採掘すること想定されるが，石炭はこの地域のイギリスやアメリカの船にとって必要不可欠であり，その販売は多くの利潤を約束する。しかし，調査がなされた産炭地は殆どなく，基本的に海岸の炭層から採掘が行われていた。委員の鉱山技師オスカル・デイフマン[51]は，ドゥエ炭鉱を知る過程で，炭鉱の採掘方式が収奪的で，技

---

48 Полное собрание законов Российской империи. 1869. т. 44. ч. 1. №46984. С. 330.
49 РГИА. Ф. 398. Оп. 33. Д. 12143. Л. 16.
50 後でこの書簡を紹介する［この翻訳には収録しない］。
51 オスカル・アレクサンドロヴィチ・デイフマン（1818-1881）は鉱山技師である。アルタイに生まれ，鉱山専門学校で高等教育を受けた（1841年）。帝室の管轄

術は時代遅れであることを突き止めた。苦役囚の労働は非生産的であり，石炭の備蓄保管のための倉庫と船積みのための設備がないことは，大きな損失につながり，太平洋の諸港での石炭の販売は確立されていない。埋蔵量をあきらかにし，現行の採炭技術に適合した産炭地を開発することに，真剣に取り組む必要がある。こうしたことは全てある程度の時間を必要とする。先回りして言えば，この仕事は開始されたものの，何年もかかってしまったことを言わなければならない。1869年に250人の苦役囚が島に到着し，必要性と養う可能性との折り合いで，その後1870年に250人，1871年に165人が島に到着した。彼らの一部は，哨所の設営や道路建設のためにサハリン南部に送られ，一部は石炭採掘のために使役された[52]。1871年から1879年まで苦役囚はサハリンに来なかった。このように皇帝の意思は法的効力を得ても，完全には実施されなかったのである。

サハリンでのその後の石炭業の発展，特に誰が炭坑を採掘するかという問題がスコルコフを悩ませた。彼はコルサコフ東シベリア総督に次のように書いた。「現在その場所を所有している者は，誓約書により現行の規則と政府が発する規則のすべてに従う義務がありますが，それらの規則は経験に基づいて短期間で作成されるべきものです。民間企業による石炭採掘は，中国人労働者の導入を許さないために，必ずロシア臣民を介して行われることを主要な条項に含めることが必要不可欠です。中国人労働者の存在は，特にそれが大人数の場合, 島での我々の日本人に対する関係が不確定であることから，たいへん不都合です。しかし，島でロシア人労働者を見つけるのはほとんど不可能ですので，石炭業に従事する民間人に対して，労働力として流刑苦役

するネルチンスク鉱山管区に勤務した。プリアムール地方とサハリン島への出張により，彼は，次の大きな論文のための豊富な資料を得ることになった。«Остров Сахалин в горнопромышленном отношений» (Горный журнал. 1871. т. 1), «Горная промышленность на Амуре и прибрежьях Приморской области» (Горный журнал. 1871. т. 2).

52 *Панов А.А.* Сахалин как колония: очерки колонизации и современного положения Сахалина. М., 1905. С. 64–65; Костанов А.И. Освоения Сахалина русскими людьми. Южно-Сахалинск, 1991. С. 94.

囚を受け入れることを許可することができないかと考えております。[53]」

同じ問題について，外務省の秘密訓令をすでに頭に置いていた彼は，ゴルチャコフ外相に宛てた書簡で次のように書いた。「サハリンを日本と共有していることで，そこにある炭鉱がたいへん深刻な問題を提起しております。現地当局によりいくつかの領域が外国人に割り当てられていますが / それについてのリストを添付します / このことは日本人に地所を，おそらくはアメリカ人に借地に出す口実を与えるかもしれません。するとアメリカ人は島で労働力を見つけることができませんので，中国から労働者を連れてくるでしょう。こうしてさらなる新しい分子がサハリンに浸透し，北アメリカ合衆国の保護の下で島に定住することは，我々の地位強化と領有の妨げとなることでしょう。[54]」

外国人がサハリンの鉱物資源だけでなく島全体をも獲得する危険性は，コルサコフに，ツアーリ政府に対しアメリカ人とイギリス人の島での活動を禁じ，サハリンの鉱山をロシア人実業家の力で開発するよう提案することを促した。

サハリンでのスコルコフ委員会の作業は，明治維新後の日本で改革が始まった時期と一致した。岡本監輔を長とするサハリン南部の新しい日本の行政部は，島の南部における日本のプレゼンスを急拡大する路線を採用した。沿海州知事のイヴァン・フルゲリム海軍中将（1821–1909）は，スコルコフにサハリン駐留軍隊長であるフョードル・デプレラドヴィチ陸軍少佐[55]の報

53　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 400.

54　同上 Л. 395–396.

55　フョードル・ミハイロヴィチ・デプレラドヴィチ（デ＝プレラドヴィチとも記す）（1838–1884）は陸軍少将であり，1868–1874年にサハリン駐在部隊長を務めた。著名なセルビア人氏族の出身である。貴族陸軍幼年学校で教育を受け，近衛部隊に勤務した。1860年に退役し［土地に関する紛争を扱う］調停吏となった。1865年に軍務に復帰し，少佐の階級で東シベリア総督府副官に任じられた。1868年から1874年までサハリンに勤務した。サハリン駐在部隊長デプレラドヴィチの活動は多岐にわたる。彼は，先住民の権利を守る多くのことを行い，いくつもの哨所と農業村を開設し，日本の当局との交渉をまとめ，1868年以降会員となった帝室ロシア地理学協会の事業に参加した。セルビア・モンテネグロ・トルコ戦争，および1877–1878年の露土戦争に従軍した。1883–1884年に沿海州の東シベリア第二旅団長を務めた。次の研究の著者である。Этнографический

告書を見せた。デプレラドヴィチは報告書の中で次のように指摘した。「サハリン島の日本人居住地の長は，本年６月14日付で私に宛てた書簡の中で，日本で生じた政府の交代を予め説明した後で，私に対しミカド政府は大君[56]がロシア帝国との間で結んだ条約を認めず，この協定を大君側の独断的で不法な行為と見なすと表明しました。

さらに私に対して，日本人には強制的に南部に入り込み定住しようとしているロシア人よりもずっと大きい領有権があることを示そうと努めています。

条約をその全ての帰結ともども否定しながら，彼は先住民に対する排他的な行政権を主張し，この件に関する我々のあらゆる介入を不法で不適当だと見なしています。

さらに彼はミカド政府の決定によるとして，ナイブチ川とオタス川を日本人に排他的で無条件に利用させることを要求しています。

同日に，ムラヴィヨフ哨所に現れた日本人の１人が，アイヌに接触した我々の下士官を殴打しました。

この行為が，私に宛てた権判事の手紙に示された主張と直接結びつき，言うなれば，それに基づくものであることを考慮し，私は，日本人をひとり捕らえるよう指示し，このことはチェピサン村で６月14日から15日にかけての夜に実行されました。

わたくしは，上に記した全てのことについて閣下に報告申し上げ，この件について交わした往復書簡の写しを添付しました。マウカやアカツバリ，タライカに新しい哨所を設置して以降，川における漁業問題が再燃することは避けられません。私はナイブチ川やオタス川についての権判事殿の要求に対

очерк Южного Сахалина // Сборник историко-статистических сведений о Сибири и сопредельных ей странах. т. 2. вып. 1. СПб., 1875. 著書にИз воспоминаний о русско-турецкой войне 1877-1878 гг. СПб., 1881. がある。

56 大君（日本語で日本国大君）とは，徳川の将軍たちによって使用された日本で古来から用いられた肩書きである。この肩書きは，三代将軍家光が中国の『易経』から借用した。この報告書が取り上げているのは，1867年３月18日にペテルブルクで調印された，サハリン島の共有に関する仮協定である。

して譲歩できないだけでなく，その逆に自分の側から，現行の条約を根拠にして，ススヤ川とスー川で漁業を行う権利を主張すべきだと考えます。

最後の事例では，ミカド政府による条約不承認が私を著しく困難な状況に置いています。

私は，わが箱館領事に対し発生した全てのことを連絡し，ただちに精力的に介入して，しかるべき説明を要求するように依頼します。

最新の信頼できる情報によれば，日本の内戦［戊辰戦争のこと］が継続中であるということを，私はここに付け加える栄誉を有します。

陸軍少佐デプレラドヴィチが自筆で署名します[57]」

イギリス人やアメリカ人の助けを借りて南サハリンでの自らの立場を強化する日本の試みについて，少なからぬ情報があった。1869年10月13日，アメリカの商船「ヤンシー」が日本兵350人と移民150人，いくつかの武器のケース，小型の火砲２門と食料をクシュンコタンに輸送した。アメリカ人はほぼ２週間クシュンコタン近傍を調査し，ロシアの要塞や石炭の炭層を調べた。イギリス人もまた同様のスパイ行為をサハリン南部で行った。「コモラント」号の船長デニソンとその士官たちは，1869年10月４日にムラヴィヨフ哨所に錨を投じて10月11日までその周辺を調査し，ボートに乗ってチェピサン哨所までやってきた。[58]

スコルコフは，島の共有から生じている日本人とロシア人の簡単ではない関係を検討して，アレクサンドル二世宛の報告書に次のように書いた。「サハリン島について申し上げますと，もっと明確な対日関係が望まれます。それ無しでは，遅かれ早かれ衝突が発生し，それは十中八九我々にとって役立つより，むしろより有害な外国の介入を避けがたく引き起こすかも知れない危険があるのです。[59]」

---

57 РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4178. Л. 414-415.

58 *Файнберг Э.Я.* Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М., 1960. С. 264-265.（邦訳 ファインベルク著，小川政邦訳『ロシアと日本：その交流の歴史』（新時代社，1973年），322-323頁）。

59 РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4183. Л. 153.

サハリンで農業を発展させることが可能かどうか検討することは，サハリンでスコルコフ委員会に提起された重要問題の一つだった。苦役囚がそこで働くことが可能で，農業はどの程度商品的なものになり，サハリンの将来の人口に保障を与えることができるのだろうか。

委員会は，ドゥエ川に面して設けられた集落とドゥエ川上流の土地，アルコヴォ谷の一部とサハリン南部のムラヴィヨフ哨所を視察した。サハリン中部についてさらに詳しい情報を収集するため，スコルコフは沿海州軍務知事フルゲリムに対し，ドゥエに流刑苦役囚の最初の集団を送り出す時，アルコヴォ谷とティモフスコエその他の場所を農業の面から調査するため，同時にサハリンに熟練した測量士を差し向けるよう依頼した。この依頼は実行され，アントン・コルズン測量士[60]がサハリンへやってきた（コルズンの調査報告を後で掲載する）［原書の417-417ページに収録］。

実見に基づいた委員会の結論は，用心深いものだった。「委員会は，島の植民の可能性について，どのような形であれ肯定的な結論を表明することができない … そうした定着の最初の経験が不可欠である。」東シベリア総督との合意により，「ドゥエ哨所に近接する場所の一つに苦役囚を農業的に定着させる実験に，本年1870年に着手することが決定された。これに際しコルサコフ中将は，苦役囚の農業的定着について，アムール川上流およびザバイカル州からさえも，相当数の役畜や農業機具，種子用の穀物などをサハリンに運ぶ必要があるが，そのことは輸送手段の不足による大きな困難のほか，さらに割り当てられた予算を超過する支出を伴うことになるので，初回は100人の働き手分の苦役囚農場を設けることにとどめることが必要だと認定した。[61]」

サハリンへの流刑苦役囚の定着に関係する複合的な問題全体の解明は，委

60　アントン・イヴァノヴィチ・コルズンは，沿海州軍務知事兼シベリア艦隊司令官フルゲリム海軍中将の官房に勤務した初級測量士である。州測量監M.M. リュベンスキーのもとで仕事をした。コルズンの最終官位は十等文官だった。

61　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4179. Л. 159об-160.

員会に提起された重要な課題の一つだった。委員会の報告には,「勅命によりプリアムール地方に派遣された委員会のサハリンにおける囚人労働組織化の問題についての意見」という部が設けられた。作業に当たって,委員会は,サハリン島が「陛下の政府」によって,その人数は近いうちに10000人にも達するかも知れないすべての流刑苦役囚を集中する場所として想定された理由から出発した。委員会はこの基本的な理由として次の５つとをあげた。すなわち島が僻遠の地であること。このことは逃亡を妨げるであろうし,島への流刑は復帰不能と認識される。島の石炭資源の採掘は犯罪者に長期間の労務を保障する。すなわち,多くの労働力が石炭輸送のために便利な船着き場の整備や,各種の水工施設の建設に従事するだろう。サハリンにおけるロシアの立場を強化するという政治的必要性から出発して,「陛下の政府」は流刑囚によって島を植民することがベターだと認めた。苦役囚をサハリンに集中することは,相当に重要な経済的利益を約束する。現地の状況を検討した委員会は,生産の増大は政治経済の公理の範疇に属することであるが,当面,政府の真剣な支援と石炭資源と農業の実施に対する科学的アプローチなくして,サハリンに苦役の中心地を設けることを実行することができるとは思われないとする点で合意した。委員会の意見によれば,さしあたりこの島にさらに600人を送ることができる。しかし展望的には,それでもやはり,島を流刑苦役囚の中心的な監獄とすることは妥当である。

委員会の基本報告書に,全部で７篇の非常に興味深い付録文書が添付された。『プリアムール地方の植民問題についての委員会の結論からの短い抜粋』を読むとき,ほぼ40年後に農業改革を準備したピョートル・ストルイピン(1862-1911)[1906-1911年にロシア帝国の首相を務めた]が,スコルコフ委員会の資料をよく知っていたという考えを取り去ることは難しい。

委員会は,アムール地方を併合したときからふくらんでいった,アジア・ロシアの行政区分のような重大問題についても意見を表明した[62]。委員会は,

---

62 *Венюков М.И.* Обзор проектов административного разделения Азиатской России, возникавших со времени присоединения Амурского края. РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2.

アムール地方の行政は東シベリア総督から分離されるべきで，さもなければ，プリアムールの住民とそこに配置された軍隊等の利益がひどく害されるだろうと見なした。この問題について，陸軍省から参加した委員セルゲイ・ズィコフ[63]は特別な意見を述べた。彼の特別な意見は全体報告書の中に収録された。

「勅命によりプリアムール地方に派遣された委員会の，この地方の軍事的植民とその防衛，および軍事体制の問題についての意見」は，長大かつ内容豊富な部篇となった。

12月委員会はペテルブルクに帰ったが，委員会の仕事はここで終わらなかった。報告書を仕上げなくてはならなかった。委員たちは，出身の各省に報告を行わなければならなかった。スコルコフは，委員会の仕事が完了したこととその成果について，皇帝アレクサンドル二世とコンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公に報告しなければならなかった。提起された全ての問題について結論を下さねばならなかった。

1870年５月25日，プリアムール地方の問題に関する特別評議会が開催され，「以下の議題についての委員会の提案」が審議された。「１．プリアムール地方の行政整備について，２．この地方への入植について，３．この地方の軍人入植地とその警備について，４．陸路と水路の交通について，５．サハリン島への苦役囚の配置についてである。

それに加えて，外務省が起案した政治的関係におけるサハリン島についての覚書が，皇帝陛下により評議会の討議に付された。[64]」

協議は活発かつ細部にわたって行われ，議題の各項目につき考え抜かれた決定が採択された（1870年５月25日の特別評議会の議事録を後に掲載する）［原書420-430ページに収録］。

Д. 4272. Л. 70-75.

63　セルゲイ・パーヴロヴィチ・ズィコフ（1830-1919）はロシア軍の将官であり，新聞 «Русский инвалид», 雑誌 «Досуг и дело» の編集長を務めた出版人であった。

64　РГА ВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 4184. Л. 1а-1аоб.

特別評議会の結論は，1870年７月13/25日にシュトットガルトにいた皇帝アレクサドル二世に奏上され，皇帝は「自らの手でこの結論を「実行すべし」とする裁決を書き入れた。[65]」

こうしてスコルコフ侍従武官長の委員会の仕事は，極東での多くの変革の端緒をつくって完了した。島を流刑苦役囚の植民の中心地に転化することを妥当とする委員会の結論は，サハリンにとって主要なことだった。島には間もなくもう一つの委員会が訪れ[66]，その後政府高官の訪問があり，そして1882年になってようやく，島を植民する目的で，サハリンに苦役囚の服役を組織することの最終的な決定が採択され，このロシアの僻遠の地の発展と開発の歴史の中で重要なマイルストーンとなったのである。

＊　＊　＊

この出版の準備に当たって，我々はスコルコフのプリアムール委員会の資料がまったく研究者の関心を引くこともなく，長い間請求されないままだったと確信せざるを得なかった。そして，もしスコルコフ侍従武官長の名前を忘却の虜から解放することが難しくないとするならば，彼が率いた委員会の詳細な報告書は，多くの大図書館や公文書館で何度も探索に失敗した後に，はじめて見つけることに成功したのである。プリアムール委員会の報告書と，その活動に関係する往復書簡のすべては，ロシア国立海軍文書館の，海軍省を統括したコンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公のフォンド中に発見された。上述のように，「勅命によりプリアムール地方に派遣された委員会の報告書」は，主要官庁と政府機関から引き抜かれた高度な専門家の委員たちによる，集団的な作業だった。この報告書は，「アムール地方」の領土，気候，経済を記述する総論のほか，人口構成やその生業，地域の農業と天然資源の

---

65 同上 Л. 21.

66 次の書籍を参照のこと。*Власов В.И., Мицуль М.С., Кеппен А.П.* Из предыстории сахалинской каторги. Южно-Сахалинск, 2013.

状態についての総合的な統計，図表，情報を含んでいる。多くの課題は特別の国家的関心事であり，委員会はそれに関連して，いわゆる意見書，委員会の結論からの抜粋，委員の特別意見などいくつかの特別文書を，基本報告書の付録という形で準備した。極めて貴重なサハリン問題，この地方の植民問題，極東新領土の行政・軍事改革についての委員会の結論のほか，国有財産省から参加したアレクセイ・リュドゴフフスキーの覚書「プリアムール地方の居住地の記述」には，特別の価値があった。スコルコフ委員長は，1869年春に極東出張について「勅命」を受けると，「自前の」自然科学者を同行させることを主張した。こうしてプリアムール委員会に，農学士でペトロフ農業アカデミーのリュドゴフスキー教授が任じられた。プリアムール地方の農業植民の開始から10年間のアムール地方とウスリー地方の居住地全般の調査を準備するには，1869年夏の３ヶ月間で十分だった。彼は，政府により提起された移民政策の大きな展望を見た。彼は，政府が主導した移民政策がたいへん有望であると認め，土地市場と農民経営の商品生産の方向を発展させる処方箋を提案した。彼の同時代人で極東問題の著名な専門家だったハイル・ヴェニューコフ（1832-1901）の著作の中に，リュドゴフスキーの仕事の引用を見つけることができるのは偶然ではない。

系統的に洪水を繰り返して満水になるアムール川は，プリアムール委員会のメンバーに深刻な懸念を抱かせた。委員会により，アムール川氾濫の害を克服する複合的手段（浸水危険度地図の作成，カザーク村の安全な場所への移転など）が検討された。極東の農業植民の開始から10年しか経過していなかったが，新しい土地の開発のプロセスはしっかりと力を集めていた。1914年までに移民の村の数は３倍になり，穀物生産は６倍に増加した。極東は（「世界一周航路」による供給によって）移入される穀物への依存から解放され，農家の生産物は外国市場に進出するようになった[67]。

委員会の結論は，極東地域を半世紀先まで発展させるベクトルを定める上

---

[67] *Алексеев А.И., Морозов Б.Н.* Освоение русскими людьми Дальнего Востока (конец XIX – 1917). М., 1989. С. 160.

で決定的なものだった。興味深いことに，1870年にその任務を果たした後も，スコルコフ侍従武官長は太平洋問題の解決におけるキーパーソンの１人としてあり続けた。太平洋にロシアの主要港を建設する問題が生じた時，コンスタンチン大公と大臣たちは彼の意見に関心を持った（スコルコフはピョートル・カザケーヴィチ（1817–1887）がウラジオストク港に築いた最初の要塞に立ち寄る機会を逃さなかった）。ウスリーの駅逓道路を建設し中国・ロシア・日本の海底電信ケーブルを敷設する際，彼の発言は決定的だった。彼は，極東の隣国との自由貿易の発展の重要性を理解し，流刑苦役囚の人道的扱いのために戦った。彼の，帝室科学アカデミー総裁で帝室ロシア地理学協会副会長のリトケ提督との繋がりは，沿海州とサハリンの天然資源の開発に学会の関心を引きつけることにたいへん有効だった（アムール地方とウスリー地方の民族的構成の研究における掌院パラーディの役割，あるいはサハリン研究における地質学者インノケンチイ・ロパーチン（1839–1909）の役割）。

しかしながら，スコルコフ委員会の資料が関心のある多くの人々のものとはならず，各省の大臣官房で静かに保管されることになったのは，多くの問題が極秘に検討されたことによるのだろうか。我々は，1869–1870年のプリアムール委員会の複合的な資料全体を学会に紹介することが，わが国の歴史のさらにもう１枚の名誉あるページを開かせてくれると期待する。

本書に収録する文書史料には，文書の名前（形態），著者の表示，主要な内容と日付から成る表題が与えられている。文書が書かれた場所と文書への署名は，原本のままとした。史料の底本については，原本か写しかと複製方法，史料の外的特徴とともに請求記号を示した。テキストの断片，データの諸要素，署名の解読（再現）はカギ括弧内に示した。多くの場合，文書テキストの文体的特徴は現代の正書法規範に適う形に編集し，句読法は特の断りなく修正した。同時に，固有名と地名の書き方の特徴は維持された。文書中に登場する主要人物についての情報は，ページ下の註記またはコメンタリーに書き出した。

付記

本稿は，北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター令和３年度公募研究（プロジェクト型）「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（採択課題「樺太（サハリン）に関する学際的研究－国境変動により何が起きるのか」）による共同研究の成果の一部である。